桜の聖母学院新聞

発行所
福島市野田町
七丁目11番1号
桜の聖母学院
高校新聞部

校歌

美しきわがまなびや
山脈はめぐりて高きその姿
黄金なすそのやすらいに
汝をば育み
黄金なすそのやすらいに
みそらはほほえむ

紙面紹介

1面・新校長に伊達幸子先生
・福島第一原発事故
・卓球部と放送部全国へ
2面・国際教養大見学記
・東日本大震災特集

新校長に伊達幸子先生

年度途中の七月一日より就任

今月1日より、桜の聖母学院中学校・高等学校の校長先生が、遠藤静子先生から伊達幸子先生に交代した。年度途中の交代は珍しいが、東日本大震災の影響というわけではなく、修道会の人事で以前から決まっていたスケジュールとのことだ。これまで担任や学年主任などを務め、宗教や歴史の授業を担当してこられた、私たち生徒には既におなじみのシスター伊達先生に、意外と知られていない経歴や、新校長としての抱負などをうかがった。

（聞き手：後藤理沙・安田理咲・和田ひかる・渡辺佳純）

新校長先生を囲む、生徒会役員の皆さん。中央は、震災で壊れた正面玄関のマリア像の代わりに、サレジオ会から寄贈された新しいマリア像。

Q：出身は地元ですか？
A：福島市内の、ここからも近い上野寺で、周りには果樹園があります。
Q：大学卒業後は、新聞記者をされていたとか？
A：朝日新聞社に8年間勤めていて、それなりに楽しくやりがいがありました。趣味で絵画や英会話、水泳などもやっていました。でも20代の時期でしたから、結婚と仕事のことで悩むようになり、桜の聖母短期大学での月曜夜の聖書講座に通って、キリスト教に興味を持つようになりました。他の宗教よりもキリスト教が、自分の心にぴったりくるものでした。
Q：それでシスターに？
A：洗礼を受けてクリスチャンとなり、一生かけてやりたい仕事に巡り合いました。それは、神様の素晴らしいメッセージを、多くの人に伝えるということです。自分の弱さに対しても、神様は優しい。一般社会では、出世やお金のことでストレスがたまる一方です。しかしキリスト教では、神様の前ではみんな平等なので、ストレスとは無縁です。
Q：シスターになられた後に教員として、最初に桜の聖母で教えたのはいつですか？
A：1993（平成5）年に初めて、桜の聖母学院中学校に赴任し、中学1年生を3年生まで3年間担任して、社会と宗教を教えました。その後、姉妹校の明治学園に勤めたりカナダに滞在し、7年前の2004（平成16）年に再び桜の聖母の高校の方に戻ってきました。その1年後に遠藤静子先生が校長として着任なさり、遠藤先生の「教育新生プラン」を一緒になって進めてきました。
Q：今回、校長先生となられてのご心境は？
A：とても重い立場ですが、神様から呼ばれたわけですので、一生懸命頑張っていきたいです。
Q：生徒に望むことは？
A：何事にもチャレンジし、すべての教科の勉強を頑張ってほしい。高校時代に頑張ったことで、大人になって無駄になるものは、ひとつもありません。受験勉強でも、ぜひセンター試験を受けて一般入試で合格することを目指してください。また部活動も頑張ってほしいと思います。
Q：道徳と宗教について、教えてください。
A：道徳は人間関係について学ぶことですが、宗教は「なぜ苦しむのか」「死んだあとはどうなるのか」など、道徳では説明できないことも説明できる。例えば、イエス様は一度死んでしまったが復活されたように、死んで終わりではないということを教えてくれる。また、死んでも天国で再会できると思うと、希望が持てます。
Q：キリスト教の良いところは何ですか？
A：キリスト教は、世界にたくさんの信者がいるので、外国に行ってもすぐに友達ができるということです。
Q：先生にとって神様とはどんな方ですか？
A：私に生命を与え、守り導いてくださる存在です。
Q：ちなみにギターはどこで習われたのですか？
A：高校時代にギター部で、クラシックギターをやっていました。
Q：最後に、伊達先生の夢を教えていただけますか。
A：ドイツにある人口5千人のオーバーアマガウという小さな村で、10年に一度だけ上演される、キリストの受難劇がありま す。村人の中から役者を決め、役作りのために10年間ひげを伸ばし続けるなど、上演そのものが壮大なドラマで、この前は2010年に上演されました。日本でもテレビで紹介されて有名になりましたが、ぜひ一度この目で見てみたいです。

遠藤前校長先生に聞く

修道会の人事のために校長職を退かれる、遠藤静子先生に、桜の聖母学院中学校・高等学校での校長時代を振り返っていただいた。遠藤先生は、長年姉妹校の明治学園中学校・高等学校（北九州市）の校長を務められた後、阪神大震災のあった1995（平成7）年より桜の聖母短期大学で教鞭をとられ、2005（平成17）年4月に本校校長として赴任された。

（聞き手：小口睦月・菅野優香）

6年3か月間を振り返って

まず生徒の皆さんに感謝したいのは、6年前と比べると年々、生徒との距離が近くなったことです。このような友好関係を生徒の皆さんがつくり出してくれたことに感謝しています。

校長として着任した時、この学校はさまざまな面で甘い学校でした。定期試験を保健室で受けることを認めていたり、出席時数が不足する生徒に簡単に補講をやってあげたりしていました。生徒にとっては居心地よい環境だったかもしれませんが、私はこれでは社会で通用しないということ、このままなら校長として単位を認めないといったことを話しました。それに対して生徒は敏感に反応しました。しかし厳しくすることは管理教育につながるし、カトリック精神も生かせなくなってしまいます。そして生徒たちは、どこまでが良くてどこからが悪いのかという間で悩みます。ですが、悩み続けることこそ、人間らしさを育てるためには大切なことなのです。

「7つの習慣J」の導入

私は、成長期の中高生に管理教育をしてはいけないと考えています。なぜなら子どもたちが自分の殻に閉じこもってしまうからです。この時期に男女が分かれて教育を受けることも、その意味でたいへん良いことだと思います。その中で生徒一人ひとりが、「自分はこういう生き方をしたい」という目標を持ってほしい。またそれによって自分をもっと好きになってもらいたいと願っています。

中学・高校という大切な時期に、人生の土台をしっかりつくってほしいと考えてきた私は、数年前に「7つの習慣J」という生徒にとってわかりやすいプログラムに出会いました。これを導入するために長い時間をかけて先生方にも納得してもらい、先生方と力を合わせてこのプログラムを実施してきたことが、相乗効果をもたらしました。今、先生と生徒が一つになり、同じ方向を向いていると思います。学校がすべきことに本気で取り組める環境が形成されたと思っています。

進学実績の向上

この学校に来て一番驚いたのは、生徒たちはなぜこんなに推薦入試で大学に入ろうとするのか、ということです。推薦で入ることは悪いことではありませんが、やはり受験の王道は一般入試です。ここ何年かで浪人する生徒が増えましたが、それは自分の夢を実現させるための心構えを持てる生徒が増えてきたという証拠でもあります。

東大合格者も出て、ある程度は実績をあげてきているとは思いますが、東日本には中間レベルの理系・看護系大学がないため、そのような方面に進みたい人たちに高いレベルの大学に合格できる実力を備えさせてあげることまでは、まだまだできていません。また普通科はいまだに文系と理系が混ざったクラス編成になっていますが、私はそれぞれに見合った学習を2年生からさせてあげたかったので、これは今でも悩んでいるところです。

制服変更について

高校生の制服については、就任した時から変えるべきだと思っていましたので、全く迷いはありませんでした。着るものと気持ちはつながっています。幼稚園から高校まで同じ制服では、成長した実感が感じられないと思っていました。高校で新しい制服を着ることで新しい出発ができると考え、それで思い切って制服を変えたのです。

しかし有名なデザイナーさんに頼むなどでお金をかけたくはなかったので、生徒たちの意見と制服検討委員会の意見を合わせながら、みんなに参加してもらって新制服が出来上がりました。特にスカートは、他の高校にはない、いいデザインになったと思っています。

しかし保護者会で初めて新制服のサンプルを見せた時には、驚くほどの反対にあいました。しかも実際にはこれを着ることのない、卒業する生徒たちの保護者でしたので、そこまで反対されるとは意外でした。大変でしたが、今でも変えてよかったと思っています。でも中学校の制服については、あれはあれでいい制服ですから、変える気はありませんでした。

聖母生に望むこと

これからの生徒の皆さんには、もっともっと強さを持ってほしい。すぐに引き下がるのではなく、自分の意見を主張してください。女子校にいるのだから、それをやらないともったいない。優しさや親切さは、6年前と変わらず十分に持っています。どうか、人の役に立っていられるうちは、自分の力を生かしていってください。

私が着任した時から、次の校長は伊達先生に決まっていました。先生は今まで、私の良きサポート役を務めてくれました。生徒の皆さんは、伊達先生の強みをどんどん生かし盛り立てて、生徒のための学校、そして生徒がもっと成長していける学校をつくっていってください。私は花園町に移りますが、今後も福島で皆さんを見守ります。

「ノーモア・フクシマ」― 日本で3番目の被ばく地より

3月11日の東日本大震災は、人類の歴史の中に永遠に刻まれることになるかもしれない災厄をもたらした。私たちの福島県の浜通り地方、大熊町と双葉町にまたがって立地する、東京電力の福島第一原子力発電所が、地震と津波によって緊急停止と全電源喪失に陥り、メルトダウン＝炉心溶融という最悪の事態に至ったのだ。原発事故としては25年前の旧ソ連のチェルノブイリに匹敵する大惨事となり、今や「フクシマ」の名は世界に知れ渡ってしまった。事故の収束の見通しはいまだ立たず、さらには今頃になって徐々に明らかになる事故の実態や、専門家によって見解が異なる放射線の人体への影響。私たちの故郷福島は、そして私たちは、いったいこれからどうなるのか。

（渡邊 優）

温暖化防止の切り札のはずが…

原子力発電所は、ウラン燃料を核分裂させて発生する熱で水を蒸気にして、その力でタービンを回し発電する。火力発電所が、石炭や石油を燃やして熱を発生させている過程を、核分裂に替えただけで、発電のしくみは同じ。しかし石炭や石油を燃やせば、地球温暖化の原因となる二酸化炭素が出るのに対し、核分裂はほとんど二酸化炭素を出さず、少量のウランで莫大な熱を生み出すため、未来のエネルギーとして期待され、1960年代から建設が推進されてきた。だがこれは、きちんとコントロールできればの話。核分裂は原子爆弾と同じ原理だから、巨大な格納容器に入った燃料棒を、常に制御棒と大量の水で調節しながら、慎重に運転しなければならない。

それゆえ、今回のような「想定外」の大災害によって、そのコントロールができなくなれば、温暖化どころか瞬時にしてとんでもない放射能汚染をもたらし、地球環境を破壊してしまうことは、可能性としてゼロではなかった。だからこそ、東京電力という首都圏の人々が使う電気をつくる会社の原発が、わざわざ東京を遠く離れた福島に建てられていたわけだ。私たちの福島は、最悪の事態が起こった時の「捨て石」だった。そしてその最悪の事態が、現実に私たちの前で起こってしまったのだ。人為的ミスではなく自然災害によって原発が破壊されたという点では、まさに人類史上初の大事故となった。

まき散らされた放射性物質

3月12日、まず1号機が水素爆発、14日には3号機が水素爆発。さらに運転停止中だった4号機でも15日に使用済み核燃料が爆発し、同日2号機でも爆発が起こった。非常用のディーゼル発電機が津波で全滅し、冷却機能が失われたことが原因だった。この数日間で、ヨウ素やセシウムといった放射性物質が、大気中に放出されたとされる。

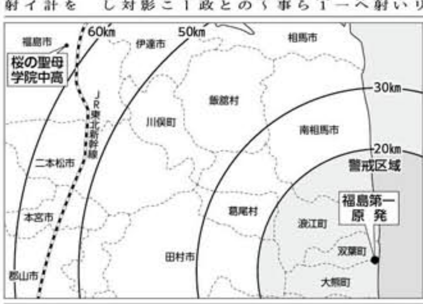
後にこの時の風向きが、住民の運命を左右する。国は原発から半径20km圏内を警戒区域として立ち入りを禁止したが、その中には年間の積算被ばく線量が20ミリシーベルトに達しない地点もある。しかし30km以上離れ、普段ほとんど原発を意識せずに暮らしてきた、北西方面の飯舘村や川俣町の山木屋地区などでは、高い放射線が検出され、「計画的避難区域」とされたことは、繰り返し報道されている通りだ。ちなみにこれらの地域からは、桜の聖母学院にも生徒が来ている。私たちにとっても、他人事では済まない事態に発展しているのだ。

フクシマを最後の被ばく地に！

以来、私たちは「ベクレル」「シーベルト」といった聞きなれない単位の数字に、連日のように一喜一憂させられることとなった。放射性物質は、光を発するホタルに例えられ、そのホタルの数を数える時の単位がベクレル。ホタルの光が放射線で、タイプによって人体への影響は異なるが、放射線の人体への影響度を測る単位がシーベルトだ。1ミリシーベルトは、1000マイクロシーベルト。よく「1時間あたりの放射線量」として発表される数値の単位は、このマイクロシーベルトだ。

私たちは自然界からの放射線を、年間約2・4ミリシーベルト受けているという。それに対して人工放射線は、性質が異なり人体への危険が大きいため、一般人が浴びる上限は年間1ミリシーベルトと定められている。しかし原発事故などの緊急時には、20〜100ミリシーベルトの範囲内で各国が決めることとなっており、今回日本政府は上限を年間20ミリシーベルトと定めた。しかしこの数値も、特に放射線の影響を受けやすい子どもに対しては高すぎる限度だとして、批判する声もある。

年間20ミリシーベルトを限度とした場合、単純に計算すれば、毎時2・3マイクロシーベルト以上の放射線を1年間浴び続ければこの値に達することになり、福島県では天気予報の時間などに発表される「今日の放射線量」の数値が、目下のところ県民の最大の関心事となっている。



だが計画的避難区域の外でも、高い数値を示す「ホットスポット」があることもわかり、また放射性物質を何らかの形で体内に取り込んでしまう「内部被ばく」の危険性も専門家によって見解が異なるなど、どこまでが安全かという客観的な基準ははっきりしない。また放射線の被害は、数年後、数十年後に現れることもあり、浴びないに越したことがないのは明らかだ。

66年前に広島・長崎に原子爆弾を投下して以来、人類は原子力という「神の火」を、あまりにも安易に考えていたのではないか、という指摘もある。福島の事故は、取り返しのつかない代償を払って、それを人類に示したのかもしれない。今はともかく、確実にこれだけは言える。「ノーモア・フクシマ」、そして「セーブ・フクシマ・ナウ！」

部説

3月11日の未曽有の大震災から早や4か月。復興に向け少しずつ歩みだしているが、多くの行方不明者の捜索や仮設住宅の不足、放射能への不安など、復興の出口は未だ見えてこない。一方政界では、復興計画の議論が続いており、与野党内では「復興庁」や「復興院」を創設する構想が浮上している。モデルは88年前の関東大震災で復興計画を立案した「帝都復興院」。総裁は岩手出身の後藤新平（1857〜1929）だ。ただ復興院が機能したのは、組織もさることながら、力量ある後藤という政治家の存在があったからこそのようだ。

大正12（1923）年9月1日昼、関東大震災により東京には焼け野原が広がった。死者・行方不明者は10万5千人以上。震災被害も収まらない2日夜に山本権兵衛内閣が発足、救援と復興の責任者となったのが内務相の後藤だ。後藤がすぐに明確な方針を打ち出し、内相就任の夜、帰宅した後藤はただちに机に向かって復興根本策を書き上げた。そこには「遷都はしない」「復興費は30億円」の項目とともに、東京の改造案が宣言されていた。「区画整理を伴う新都市計画実施のため地主に断固たる態度をとる」。復興のためには決断が重要という後藤の考えがみえる。また後藤の大胆さは「復旧」ではなく「復興」を掲げたことからもわかる。12日には、「復興」を掲げた詔書が発せられた。

スピードも際だっていた。復興院発足（27日）は震災から1か月もかからなかった。復興院は、震災で再び大きな災禍を受けないよう東京を改造し近代的な首都を造ることを目指した。震災で焼けた地区の大規模な区画整理を施し、幹線道路、歩道や公園、鉄筋コンクリートの小学校、同潤会アパートの整備も描いた。また後藤は医師出身で衛生行政に詳しく、都市建設のエキスパートだった。台湾総督府民政長官や南満洲鉄道初代総裁、東京市長、閣僚を歴任した後藤。構想が大きく「大風呂敷」とも呼ばれたが、政官財界に「後藤派」と呼ばれる人脈が広がっていた。その人脈こそが復興院を支えたと言っても過言ではない。復興院建築局長は耐震論の権威で東京帝大教授の佐野利器（としかた）、経理局長には戦後国鉄総裁として新幹線を推進することになる十河（そごう）信二を起用。実力派の官僚、専門家を集めた。復興院の計画をもとに政府は大正12年12月に復興予算を提出。震災から4か月という驚きのスピードだった。衆院で多数派だった野党政友会が削減したものの復興予算は成立し、同年末から、東京市などの協力で復興事業が始動した。

ひるがえって、戦後の民主主義のもとで選ばれた現在の国会議員や閣僚たちは、震災から4か月が経過した今でも明確な案を示すどころか、野党は倒閣に全力を注ぎ、与党の一部は身内の足を引っ張り、内閣不信任案は否決されたのに関心事はいつ首相が辞めるかの一点のみ、といった不可解な政争を繰り返している。このままでは復興後の国民の生活は、到底描けない。今こそ国会議員は党派や派閥を超えて一丸となっていくべきではないか。永田町で愚かな闘争が行われている中でも、原発作業員は命を懸けて事故の収束に向けて働いている。被災者も同じだ。行方不明の家族を捜索し続ける人、放射能という見えない敵に怯え生活している人、いつ元通りの生活に戻れるか不安でいる人など、多くの深い傷を持ちながらも、明日は少しでも良い方向になることを願って一日一日を懸命に生きている。

国会議員よ、今こそ被災地の本当の声を聴け。テレビ画面の被災地の様子をただ眺めるだけではなく、現地に足を運べ。ただし、国会答弁のための視察ではなく、そして、がれきの撤去や腐敗した魚の処理など、少しでも被災地復興のために汗を流してみてはどうだろうか。永田町で議論し法案を通すことだけが、国会議員の仕事ではない。国民に選ばれた代表として、この戦後最大の国難に、万策を尽くして立ち向かってほしい。それによって、日本の政治の真の復興も始まるはずだ。

卓球部6年連続インターハイへ

本校が誇る卓球部は、6月3〜5日にかけて行われた福島県高等学校卓球大会女子団体の部で、磐城第一高校を破って優勝し、高校総体全国大会への出場を決めた。また個人では遠藤彩樺さん（2年・会北中出身）が優勝、原沙也可さん（1年・本宮一中出身）が3位。ダブルスでも遠藤さん・熊谷亜美さん（2年・郡山ザベリオ学園中出身）ペアが優勝し、それぞれ全国大会への出場権を獲得した。

団体での全国大会出場は2年連続、個人も含めれば卓球部が全国大会に駒を進めるのは6年連続となる。今年のインターハイ全国大会卓球競技は、8月9〜14日に青森県で開催される。本校は1、2年生が主体の若いチームなので、地元の青森山田高をはじめとする全国の強豪の胸を借りるつもりで、思い切りぶつかってきてもらいたい。

放送部・宍戸さんも全国へ

放送部の宍戸優香さん（3年・西信中出身）も、第58回全国高校放送コンテストの福島県大会で、朗読部門の優秀1席に輝き、全国大会へ出場権を得た。この後、準々決勝にあたる一次審査を突破すれば、7月27日の国立オリンピックセンターでの準決勝に進み、翌日NHKホールでの決勝審査となる。

宍戸さんは音楽部や生徒会でも活動するかたわら、様々な学校行事の司会などで大活躍してきたが、ぜひ全国大会でもその美声を響かせ、勝ち抜いてほしい。

はりこ

▼パリで開かれていた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の第35回世界遺産委員会は先月24日、小笠原諸島（東京都小笠原村）の世界自然遺産登録を決定した。他地域にみられない固有種の多さなどが評価された。日本の自然遺産は、白神山地（青森・秋田県）、屋久島（鹿児島県）、知床（北海道）に続き4か所目となった▼そんな美しい小笠原諸島の一つ硫黄島では、太平洋戦争末期の昭和20（1945）年2月から3月にかけ、B29の中継基地にするため進出の機会を狙っていた米軍と、これを阻止しようとする日本軍との間で激しい戦闘が行われ、日米双方で2万8000人あまりが戦死した▼硫黄島は日本列島と、アメリカ領となっているサイパン島のほぼ中間地点にある。硫黄島が奪われれば、日本全土は空爆域に入り、焦土と化す可能性があった。つまり日本にとっては、硫黄島は本土を守る最後の防波堤であり、この地を失うことは、日本の敗戦を意味していた▼昭和20年2月、ついに上陸部隊6万1千人（海兵隊）、火力支援・補給担当（海軍）22万人からなる米軍の攻撃が開始された。対する日本軍は約2万1千人、しかも飢えと病気のため実動兵力はこの半分ほどだった。地熱や飢えや渇きに耐えつつ長期戦をするよりは、万歳突撃や自決を望む将兵も少なくなかった。しかし日本軍の指揮官栗林中将は、死を急ぐことを戒め、少しでも長く、効果的な抵抗を続けるよう命じ続けた▼このため、米軍が当初5日ほどで終わると予想していた戦いが、日本軍は実に1か月以上抵抗を続け、米軍の死傷者は日本軍を上回っていた。今でも硫黄島は、沖縄とならぶ激戦地としてアメリカ人の記憶に刻まれている▼今年は真珠湾攻撃から70年という、節目の年にあたる。戦争体験者はよくこう口にする。「戦争には勝者も敗者もない」。これは今でも世界中で行われている、全ての戦争や紛争や内戦にも共通している。この夏は、世界遺産に登録が決まったこの美しい島の歴史に触れ、戦争というものを改めて考えてみる良い機会としてみてはどうだろうか。

（滝口美郎）

寺島先輩の案内で 国際教養大キャンパス見学記

2011年度の河合塾調べの国公立大学・学部の偏差値ランキングによれば、社会・国際・法・政治分野において、「M」ランク（偏差値70以上）に該当するのは、あの東京大学・文科Ⅰ類と、一橋大学・法学部の2つだけ。そして次の「O」（偏差値67・5～70）の欄には、4大学4学部がランクされている。前号で特集した筑波大学の、社会国際学群・国際総合学類と、一橋大学・社会学部、それに大阪大学・法学部…と、ここまで3つはお馴染みの超難関国立大学だが、最近その欄に聞きなれない名前が肩を並べるようになった。その「国際教養大学・国際教養学部」とは、いったいどこにあるどんな大学なのか。ここ数年、日本中の国公私立の全大学の中で、注目度・人気・偏差値そして求人も含め、間違いなく上昇率ナンバーワンのこの大学には、3年前に本校英語科を卒業した寺島絵梨香先輩が在学中だった！

（取材：二階堂蕃・滝口美那）

寺島さんは月舘町立（現在は伊達市立）月舘中から本校英語科に入学し、現在は国際教養大学4年生。

24時間・365日開館している図書館は大学のシンボル。

7年前に設立された秋田の公立大学

大学全入時代の今、特に地方の大学は生き残りのための学生数確保に追われる中、飛ぶ鳥も落とす勢いで志願者を急増させている新設公立大学が、東北地方の日本海側にある。2004年、秋田県雄和町（現在は秋田市）に、ミネソタ州立大学機構秋田校の跡地を利用して開校された、公立大学法人が運営する単科大学、国際教養大学だ。英語表記になれば、Akita International University（AIU）と地名が入るが、聞くと東京三鷹の国際基督教大学（ICU）と勘違いする人もまだ多いようだ。

実際に訪ねてみると、車なら秋田自動車道をひたすら走り、秋田空港ICを降りればすぐだが、電車で行くとなるとJR秋田新幹線の秋田駅から奥羽線で二つ目の和田駅で降り、さらにバスで約15分かかる「陸の孤島」。周囲には個人商店があるだけでコンビニもなく、学生生協も閉まっていることが多いため、買い物にはバスで15分のイオンモールまで出るという。

とはいえ、緑に囲まれた、秋田杉をふんだんに使った校舎は新しく清潔で、大きな総合大学にはない家庭的な雰囲気の中、思う存分勉強に打ち込める環境だ。学部は国際教養学部のみで、定員を1学年175名に限定していることも、難関大学とされる理由でもある。

人気の秘密・その1は徹底した英語教育！

これまでの日本の大学では、たとえ外国語学部や文学部などで4年間英語を学んでも、企業で即戦力として英語を使って交渉にあたったり、国際機関で自在に活躍するといった人材は、なかなか出てこなかった。そのためアジアの中でも、英語を共通語とするインドやシンガポール、さらには成長著しい韓国や中国の学生の英語力にすら、後れを取っていると言われる。

この大学は、雪深い秋田に構えながらも、6割が外国籍という教員が、何とすべての授業を英語で行なっている。さらには1年間の海外留学が必修という、徹底した教育方針によって、グローバル化の時代の日本を支える国際人を養成しようという、明確な目的で運営されている大学なのだ。

新入生はまず、1年次の1年間は全員寮生活が必修。ここで世界各国から来ている交換留学生と交流して社会性や国際感覚を身に付けることにより、留学生活の準備をする。その間、授業では「英語集中プログラム（EAP）」と「基盤教育（BE）」の過程を終え、専門教育課程では「グローバル・ビジネス過程」と「グローバル・スタディズ過程」のどちらかに進む。

そして主に3年次の後期から4年次の前期に、1年間の海外留学に出かけていく。しかし最近では2年次の冬から3年次の秋に行く学生も増えているという。現在の留学先は、35か国・118大学にのぼり、学生の希望をもとに大学が割り振る。留学中の取得単位は、国際教養大学の単位と互換されるので、4年間での卒業が可能だ。

今回案内してくださった、寺島絵梨香先輩も、2010年1月から12月にかけて、アメリカのミネソタ州ウィーナ大学に留学し、半年前に帰国して、現在4年生。しかし、帰国後いきなり厳しい就職戦線に放り込まれることとなり、ライバルに後れを取るのでは、という不安が頭をよぎるが、心配は無用。なぜなら国際教養大学の学生は、各種企業や自治体などから、英語が使える即戦力として、引く手あまたなのだ。ちなみにリーマンショック後で超氷河期と言われた2010年度の就職率も、何と100％であった。

人気の秘密・その2は充実した施設！

1年次は全員が学生寮という制度は先に説明したが、2年次以降の学生のためにも、しっかりキャンパス内にログハウス風のグローバルヴィレッジという学生アパートがあり、ルームシェアをすれば格安で入居できる。今回も、寺島先輩の入学以来の親友だという、現在のルームメイトが一緒に案内してくださった。

だが何と言っても名実共にこの国際教養大学のシンボルとなっている施設は、半円ドーム形状の傘型屋根を持つ、古代ローマのコロッセウムを模したような、巨大な図書館（上写真）。ハリーポッターのホグワーツ城にも似ているが、石造りではない。木造架構にはすべて地元の秋田杉を使用し、2008年に完成した。スタジアムの踊り場のような4段のフロアには、書架の背後に自習などにも使える閲覧テーブルが設置され、PC用の電源コンセントがあって無線LANも使い放題。約6万冊の蔵書と約250種類の雑誌や新聞、約2,400タイトルの視聴覚資料などを備えている。

世界に開かれた大学としては意外に小ぢんまりとした正面玄関。

しかもこの図書館が、コンビニエンスストアよろしく、24時間365日開館しているのだ。実際に寺島先輩も、真剣に勉強しなければならない時などは、この図書館のソファで仮眠しながらひと晩を過ごすこともあるという。さらに驚くべきは、たいていの大学図書館はその大学の学生でなければ入れないのに、ここは全くのフリーパス。それゆえ私たちが行った土曜日にも、一般の秋田市民が自由に利用していた。まさに地域に開かれた大学だ。

この他にも、個人で使用できる遮音仕様の個室を備えた自主言語異文化学習センターなど、語学力を最大限に伸ばすための施設が充実。合コンやアルバイトといった学生生活を思い描く人には不向きな環境かもしれないが、自分と社会の未来のために充実した4年間を過ごしたい人には、うってつけの大学と言えよう。キャンパス内で行き交う学生数も少ないので、学生もほとんどが顔見知りだ。

自然に囲まれた静かな環境の中で語学を磨き、やがて世界に飛躍する。東北地方の小さな公立大学の挑戦が、日本の大学教育のあり方を揺さぶり始めている。

多様な入試制度

このような魅力あふれる国際教養大学に入るためには、16種類もの多様な入試制度が用意されている。

私たち日本の高校に在学する高校生対象の入学試験は、まず11月にセンター試験を利用しない推薦入試とAO入試がある。それぞれに出願資格があり、TOEFLやTOEICの得点や、英検（推薦は2級、AOは準1級）などのいずれか一つを満たせば出願可能だ。個別学力検査は日本語と英語の面接に加え、英語の小論文となっている。

センター試験を利用する一般選抜試験は3種類あるが、他の国公立大学の二次試験の日程とは別に設定されているので併願が可能。A日程は2月上旬、センター試験は国語と英語が必修で、地歴公民・数学・理科の中から1科目の、3教科でよい。B日程は2月半ば、センター試験は国語・英語・地歴公民・数学・理科の5教科だ。どちらの個別学力検査（二次試験）も、国語と英語の2教科。3月中旬のC日程は、センター試験は英語のみ、個別学力検査は英語小論文のみ。

さあ、あなたも寺島先輩に続いて、秋田から世界へ飛び出そう！

私たちは3・11を忘れない

2011年3月11日午後2時46分、宮城県沖でマグニチュード9の巨大地震が発生、太平洋側の東北地方は震度6～7の激しい揺れに襲われた。さらにそれに伴う大津波によって、宮城・岩手・福島県の沿岸部では1万5千人を超える尊い人命が一瞬にして失われ、生き残っても生活の基盤を奪われた人々は数十万人を下らないと見られる。加えて私たちの福島県の名を、残念な形で世界に知らしめることとなった、福島第一原発のメルトダウンにより、福島県民は今でも目に見えない放射線の被害に脅かされている。

本校生の中からは、その10日前に卒業した当時の3年生も含め、奇跡的に一人の犠牲者も出さずにすんだが、新聞部では、この学校の歴史の中でも、また私たちの人生の中でも、確実に大事件として刻まれることになるであろう、この東日本大震災の体験を、記憶が薄れないうちに記録し、後世に残したいと考えた。そこで各学年から数名ずつの生徒の皆さんに参加いただき、実際に経験したことや、震災後約4か月が経過した今、改めて思うことなどを、座談会形式で語ってもらった。

【参加者】
3年生（当時2年生）3名
2年生（当時1年生）2名
1年生（当時中3）5名
（桜の聖母学院中出身2名
福島市内中学出身1名
二本松市内中学出身1名
郡山市内中学出身1名）

あの日、私たちは

——まず、地震が起こった時にどこで何をしていたかを、それぞれ教えてください。本校では通常の授業の日で、2時40分に6校時が終わった後の休み時間でしたね？

3年生A：私たちのクラスは、6校時の国語が終わった後に、7校時の体育のために着替えて第一体育館に移動していました。その2日前の昼頃にも地震が起こっていましたが、その時とは明らかに違う激しい揺れがしばらく続いたので、体育の鈴木尚子先生がすぐに外に出るように指示され、中庭に避難しました。

2年生A：私たちは7校時の数学の準備をしていた時でした。先生がいなかったので、とにかくみんなで机の下にもぐりました。やがて林先生が来てくださり、その誘導で1階に降り、なりふり構わず窓から飛び降りて、中庭に逃げました。

1年生A（当時桜の聖母学院中学校3年生）：中学3年生は実力テストの最中で、3時まで試験の予定でした。監督をなさっていた担任の佐々先生に、すぐ机の下にもぐるよう指示され、数分間続いた激しい揺れがいったん収まったすきに、中学校の中庭に避難しました。その後、グラウンドに移動して高校生の皆さんと合流しました。

3年生B：中庭からグラウンドに移動してからが、辛かったよね。雪が降ってくるのに余震は続くから、教室へはなかなか服を取りに戻れないし。

3年生A：寒くてこれ以上グラウンドにはいられないと先生方が判断され、一番最近に耐震工事を終えていたという第一体育館に生徒全員が移動して、保護者の迎えが来た生徒たちはそれぞれ帰って行ったけど、私の親が迎えに来たのはもう夜の10時近くでした。固定電話も携帯もつながらなかったので、親が直接学校に来るのを待つしかなかったわけです。その間ずっと停電だったので、ろうそくと懐中電灯がこんなにも役立つものだと初めて知りました。

2年生A：体育館の中では食べ物も回ってきました。お菓子類や、温かいお茶がありがたかった。バレンタインでもらっていたというチョコを提供した先生もいたけど（笑）。

3年生C：そういえば今年のホワイトデーのお返しは、震災のせいで完全にすっぽかされた（笑）。

▲校舎屋上の、壊れた高架水槽。3月11日当日の午後4時26分、事務の近野敬一さん撮影

1年生A：たくさんの食べ物を提供してくださった、ヨークベニマル福島西店の店長さんには、その後5月に1年生が学年行事の中でお話をうかがったので、別に紹介します。

——JR東北線をはじめ、公共交通機関がすべてストップしたわけですが、在校生の中で、その日のうちに迎えが来なくて、校長先生の住まいでもある修道院に泊めてもらった人はいますか？

3年生C：私を含め、郡山、須賀川、二本松、安達、山形方面の生徒が18名、夜の9時過ぎに、学校から徒歩15分ほどの野田町修道院へ移動しました。昼間ならたいした距離ではないのでしょうが、停電で真っ暗な上に雪も降る中、とても遠く感じました。1年生はまとめて一つの部屋をあてがわれましたが、私たち2年生と久保文先生と司書の佐藤志乃さんが、広い部屋にありったけの布団を敷いて雑魚寝しました。感動したのは、4人のシスターの先生方が一晩じゅう椅子に座ったまま、ラジオで地震情報を聞きながら、何か起こったらすぐに逃げられる用意をしてくれていたことです。翌日には電気が回復し、床暖房で暖まりながら一日じゅうテレビで震災のニュースを見ているうち、夕方に迎えが来ました。

——桜の聖母中以外の中学校出身の1年生は、その日は中学校の卒業式でしたね？忘れられない日になってしまったのでは…

1年生B（当時福島市内中学校3年生）：私は午前中に卒業式を終えた後、さっそく携帯電話を買ってもらうために（全員：「あるある」）、母と市内御山の電機店に来ていた時に地震が起こりました。1階が駐車場で2階が店舗という建物ですから、激しい揺れで商品が落ちてくる中、何とか車に戻って信号の消えた道を自宅に帰りました。

1年生C（当時二本松市内中学校3年生）：私は卒業式の後、希望者で出身小学校に報告に行き、先生の手伝いをして疲れ、自宅に戻った時に地震が。

1年生D（当時郡山市内中学校3年生）：卒業式の後、母とレストランで食事をしていて、ものすごい揺れで食器は割れるわ、飲み物は飛び散るわ…半額だけでいいというので支払って出てきました。郡山だけがひどいのかと思ったら、自宅のある鏡石はもっと倒壊していて、たいへんな状況でした。

震災後の生活

——本校では屋上の高架水槽が壊れて（写真）水道が使えなくなったため、生徒はそれから約1か月間の自宅待機の期間に入りました。ライフラインの復旧には、それぞれの家でどれくらいかかりましたか？

3年生A：わが家は電気は全く止まりませんでした。ですが水が、最初のうちは出たけど、その後一週間にわたって断水でした。

2年生A：電気は3日間、水は一週間止まりました。お風呂に入れないのはきつかったけど、避難所の人たちのことを思えば…

2年生B：洗い物ができないので、お皿にラップを張って食事をしていました。今では懐かしい。

——都市ガスは？

全員：安全装置みたいなのが働いて止まった家はあったけど、解除すればほとんど無事に使えました。

3年生B：それより、ガソリンがひどかったよね。普通に買えるようになったのは、3月末頃かな。

3年生C：スタンドにほぼ一日並んだのに、実は売ってもらえるものが何もなかったってことも。みんなキレていたけど、仕方ないとあきらめて帰っていくところが、東北人らしいと思った。

——地震の後、どこかに避難していた人は？

1年生C：父の大学時代の友人が沖縄にいて、しばらく兄と私だけでそちらにお世話になりました。沖縄の人たちは、福島県全体が津波と原発の被害を受けたと思っている人が多く、本当に親切にしてくださいました。人のつながりの大切さを痛感しました。

1年生D：反対に、東京の人たちは、みんながみんなではないとは思うけど、ひどい話を聞いた。福島ナンバーの車に向かって石を投げたり、とか。

3年生B：震災後1～2週間の頃の、東京の人たちの買い占めのニュースにはあきれた。それによって水やガソリンが被災地に届かなくなるとは、考えなかったのだろうか。そして今でも、東京の放射線量とかを心配して測定しているけど、だったらその何百・何千倍を浴びている私たち福島の人間はどうなるの？

——買い物で並んだ人は？

3年生A：方木田のコープマートに入るのに、4時間並びました。

2年生A：ラジオの生活情報で、福島駅西口のヨーカドーが営業していると報じられた途端、みんなが殺到して、行ってみたら歯磨き粉くらいしか残っていなかった（笑）。

——放射線の心配もあったから、みんなあまり外に出られなかったのでは？

2年生B：だから携帯のチェーンメールとかがよく回ってきました。正しい情報ならいいけど「石油精製所が火災になって有害物質が放出されている」とか「放射能にはうがい薬が効く」とか（笑）。

2年生A：でも、感動するメッセージも回ってきて、励まされたのも確か。

この震災を超えて

——最後に、百日余りが経った今、振り返って思うことは？

3年生A：原発には裏切られたという思い。これから福島はどうなるのか。

1年生A：震災後の避難生活のおかげで、普段当たり前に使ってきた電気や水が、こんなにもありがたいものだということを実感しました。これからも贅沢はしてはいけない。

2年生B：普段あまり聞かなかった、ラジオというものを見直した。

2年生A：これまで生きてきて、家族がこれほど一つになったことは正直なかった。お父さんがこんなに頼もしく思えたことも（笑）。二階で寝ると危ないからと、家族全員で一階で川の字で寝たなんて、いつ以来だろう…

1年生B：近所の人たちとの会話も増えました。一緒に列に並んでいた見ず知らずの人たちと話すなんて、普段はあり得ない。

3年生B：去年ESTA（英語科の海外語学研修）でホームステイした、カナダのホストファミリーも、とても心配して連絡をくれました。世界中が私たちを気遣ってくれている。人は人によって支えられていると、改めて感じた。

3年生C：亡くなった人やご家族の方々、放射線が危険な地域から退去せざるを得ない人たちには申し訳ないかもしれないけれど、ある意味この震災を体験できてよかったと思う。これまでここに暮らしてきて気付かなかったけど、東北人の強さを知ることができた。東北人だからこそ、きっとこの苦難も乗り越えられる、と信じています。

1年生D：遠藤校長先生もおっしゃっていた「神は乗り越えられる苦難しかお与えにならない」は、本当だと思います。

「商品は二度殺すな」 齋藤店長のプロ意識を見た

3月11日夜、学校に残った数百名の生徒たちが、お腹をすかせていた。先生方が近隣の店舗を回って食糧の提供をお願いしたが、ほとんどの店が本社との連絡がとれないという事情もあってか、提供を断る中で、西道路のヨークベニマル福島西店の齋藤民男店長だけが、独自の決断で多くの食糧を無償で本校に提供してくださったのだ。

震災後の混乱がある程度収まった5月7日（土）、1学年の行事「キャリアガイダンス」の講師の一人として来校された齋藤店長は、その時の状況を語ってくださった。

地震が起こった時、まずはお客さんを安全に避難させることに全力を注いだ。それは何とかできたものの、電気がすべて止まったため、冷凍庫や冷蔵庫の商品はこのままでは売り物にならなくなる。齋藤さんは若い頃に先輩からの教訓として、「商品は二度殺すな」と教えられてきた。私たちの口に入る食べ物は、肉でも魚でも野菜でも、尊い命を殺していただいている。そうやってできた商品を、売れ残して捨ててしまうことは、何としても避けなければならない、ということをモットーに仕事をしてきた。震災が起こった時、このままでは二度殺してしまうことになる商品を、必要としている桜の聖母の生徒の皆さんに食べてもらえるのならば、ぜひ提供したい。この齋藤店長のプロ意識が、第一体育館で凍えてお腹をすかせていた私たちを救ってくださったのだ。

震災後はしばらく店を開けない状況だったが、これまで支えてくれた地域のお客さんのためにも、売れるものを店内から持ち出し、駐車場に仮設売り場を設け、端数の出ないような値段を本来の価格よりも安めに定め、一人が買える個数を限定して営業を続けたという。今回の出会いから私たちは、本物のプロフェッショナルとはこういう判断ができるリーダーだということを教わった。来年には定年となる齋藤店長だが、これからも多くのプロフェッショナルが、福島の地域社会を支えていってくれるだろう。私たちもこういう社会人を目指したい。齋藤店長ありがとうございました。

（清水川ひより）

編集後記

♥4人だった部員が、一気に11人に増えました！サッカーチームが組めちゃうね。（番長）

★初めての新聞部での活動！前校長先生いい方でした。（理事長）

◆前校長先生への取材に緊張＋感動＝いい経験でした。（船長）

●いきなりの仕事が新校長先生への取材で、とても緊張しました。（支部長）

♠伊達校長先生の、意外なお話を伺えて、得した気分です。（編集長）

♣初めての新聞作りで戸惑うこともありましたが、完成して感動した。（組長）

♪新聞部員としての役割を、無事に果たせてひと安心です。（ト長調）

★地球温暖化の影響、わが身にふりかかるこの夏。（ハンチョウ）

◉下調べに2週間、書き上げるのに一日。下調べの重要さを再確認。（永田町）

♣東大と筑波大に続く、3回目のキャンパス取材は秋田…同じ東北なのに、遠かった。（八百長）

☂帰国したら編集終了していた。3年間一文字も書かずに卒業とは…（絶好調）

夏休みの旅行はもうお決まりですか？
好評受付中
JTB東北 福島支店
〒960-8035
福島市本町5-26（本町本田ビル1F）
TEL 024-521-0101
営業時間：月～日曜日／10:00～18:00
（水曜・祝日・振替及び12/30～1/3休業）
JTB東北福島支店ホームページアドレス
http://www.jtb.co.jp/shop/fukushima/

赤本、センター対策、願書
入試対策フェア
ポイントカード会員受付中!
100円ごとに1ポイントたまる!
大町店・北店にて利用できます。
文化情報発信館 西澤書店
大町店 福島市大町7-20 Tel.024-522-0161 Fax.024-522-4139
北店 福島市南矢野目字中江12-5 Tel.024-557-5101 Fax.024-557-5107